

「水の祭祀場を表した埴輪」についての覚書

消 斎

1. はじめに

今回出土した埴輪は囲み形埴輪と家形埴輪が一体成形されているもので他に類例をみないものである。墳丘での埴輪祭祀について、あるいは古墳時代の祭祀そのものについても幾許かの示唆を与えてくれるものである。水の祭祀遺跡とされている南郷大東遺跡における導水施設との構成要素の共通性は、遺跡の具体的なイメージを描くことができるようになった。また囲い形埴輪の機能についても一定の共通認識に達することができる資料である。

この小論では埴輪と遺跡との実例をそれぞれ比較し、共通点や相違点を探り出して基礎的なデータ整理をするとともに、心合寺山古墳出土の水の祭祀場を表した埴輪の意義づけを行うことを目的とする。

2. 囲み形埴輪について

1) 研究抄

これまで囲み形埴輪は個体数が少ないうえに碎片ばかりであることから、形象埴輪のなかで形態面や編年の研究は現在でも進んでいない。性格についても「何を」囲っているのかは意見の別れるところであった。しかし、1998年に大阪府藤井寺市狼塚古墳から出土した木槌形土製品を伴う埴輪によって飛躍的な進展をみせた。そして今回の心合寺山古墳例によって一定の共通理解を得る段階に達したものと思われるが、まず、これまでの研究成果を概観しよう。

囲み形埴輪については、これまでその用途について様々な見解がなされていた。古くは1932年の後藤守一氏による帷帳・壁代説である。いずれも葬送具としての使用を主に想定されているが、壁代は伊勢神宮の遷宮の使用例も挙げており、葬送に係わる祭祀や遷宮での障屏など秘事の目隠しに用いたとの見解を示している。おそらく、古墳からの出土ということで葬儀具や神事との関わりを考えたものと思われる。墳丘での祭祀を的確に言っていたものである。

しかし、これ以後は出土数が少ないこともあり余り論じられる機会もなかったが、1975年に北野耕平氏による稲城説が提出される。これは囲み形の特徴のひとつである剣先状突起物に注目し、垂仁紀、雄略紀に記載されている防御施設であると論じた。また他には剣先状突起と出入口があることから中国の猪圈との類似性をとらえ、家畜小屋であるとの説が広まり、1984年の「大和の埴輪」においても「それに類するもの」との説明がされている。

さらに1984年に小笠原好彦氏は赤堀茶臼山古墳の家形埴輪を取り上げ埴輪製作方法によるセット関係から新たに配列をやり直すことによって囲み形埴輪を前方に配置し、豪族居館を取り巻く柵状の塀と門であると考えた。⁵同様の説は橋本博文氏によっても出されている。⁶これらの説は囲み形埴輪の形態的特徴から性格を類推しようとしたもので、後藤の提示した家形埴輪配置原状想定図にある倉、居住、納屋、主屋などという機能面からみた記号の必要性によって導きだされた説といえる。ここでは埴輪を含めた墳丘での祭祀や古墳からの出土という王権との関わりを排除したものであり、形態のみをとらえている点は後藤の帷帳・壁代説よりも退化した感がある。

しかし、この時点では遺物数も少なく、全体を復元できるものが赤堀茶臼山古墳例のみで、このような形態からの機能追求は仕方のないことであった。

1990年代にはいると三ツ寺Ⅰ遺跡の調査成果によって豪族居館のイメージが具体的にとらえられるようになった。とくに大型掘立柱建物の中に水が流れる石敷遺構と覆屋をもつ井戸の検出は、居館内の祭祀の実態が明らかとなった。これを受けて辰巳和弘氏は居館の一画に様々な祭式儀礼を執行する公けの空間＝「ハレの空間」の存在を予察し、囲み形埴輪は「ハレの空間」を囲む柵列を象徴化あるいは抽象

化したものとの説を展開した。さらに長瀬高浜遺跡の柵列に囲まれた掘立柱建物を祭儀用建物とし、柵列の鉤状の構造と囲み形埴輪の形態の同一性を指摘した。⁷

関西大学に所蔵されていた鞍塚古墳西方から出土した埴輪を整理した伊藤雅文氏と林部均氏は、出土した埴輪の製作工程を復元し、集成を行ったが、性格については言及しなかった。

大阪府長原遺跡の一ヶ塚古墳から囲み形埴輪を検出した櫻井久之氏は集成を行うとともに形態面からの考察を行ったが、性格については象徴としての柵列ならば複数個体の出土は不必要と考え、居館全体をめぐるのではなく「もっと限られた範囲(ある種の聖域)を画する施設の可能性を考えなければならぬ。」とした。⁹しかし、これは埴輪自体がその象徴であるのか、あるいは埴輪がそれ(聖域)を囲っているのかは明確ではない。

以上のように赤堀茶臼山古墳から出土して以来、60年を経て少数ではあるが幾つかの学説があったものの定説化することはなかった。しかし、狼塚古墳から出土した囲み形埴輪はこれまでの認識を大きく覆すものであった。これは長さ50cm、幅15cmの箱状の埴輪8個を方形に並べて、1辺1.2m前後の区画を作りだして囲み形埴輪としているものである。各々の長辺には2本の板状の帯が付き、これに3～5の突起が付いている。また内部には1～2枚のしきりがあり、上部には三角形(剣先状突起)の飾りが廻る。このように形態上、特異であったがさらに囲みの内部で木樋形土製品が出土したことにより、調査担当者である上田睦氏は奈良県御所市の南郷大東遺跡の導水施設との類似性から埴輪全体が導水施設を表現しているものと考えた。¹⁰

南郷大東遺跡の導水施設の調査を担当した青柳泰介氏は囲み形埴輪に関する論考のなかで埴輪と遺跡の集成から様々なことに言及したが、機能・性格については「祭殿」を象った家形埴輪もしくは「導水施設」を象った木樋形土製品を囲むための埴輪であるとした。¹¹

このように囲み形埴輪は導水施設に関連するものであろうとの説が大勢を占めるなかで黒崎直氏は南郷大東遺跡および纏向遺跡の導水施設下流域から寄生虫が検出されたことによりこれをトイレと見なし、遺構そのものを首長層に連なる女性のトイレ付き「ウブヤ」とした。そして囲み形埴輪はウブヤを表現したものと解した。¹²

2) 埴輪からのアプローチ

囲み形埴輪の出土が報告書や刊行物に記載されている古墳や遺跡は管見では28件ある。また、囲み形埴輪は出土していないが、囲み形埴輪と密接な関係をもつ木樋形製品が出土している古墳が1基あり、これを含めた29古墳を表1にまとめた。

A) 出土地点

出土地点については中部から九州まで全国で出土しているが、大阪10件、奈良6件などの近畿圏に集中している。唯一古墳からの出土ではない西大寺宝ヶ丘遺跡があるが出土状況については不明である。また、安部山1号墳は主体部の排水施設に転用されており、周辺にあった他の古墳で使用されていたものと推定されている。鞍塚古墳では周濠から出土するとともに埴輪棺に転用されていた。野毛大塚古墳では埴輪は出土していないが、埴輪と密接な関係をもつ木樋形の石製品が主体部から出土している。

B) 墳丘形態と埴輪組成

前方後円墳13、帆立貝形古墳6、方墳4、円墳4、不明1と全般にわたっている。その墳丘長は畿内では市庭古墳200m、前野山古墳190m、心合寺山古墳157m、野中宮山古墳154m、ナガレ山古墳90mなど巨大な前方後円墳が含まれる。また、畿外では金蔵山古墳165mとこの時期の吉備地方最大であり、宝塚1号墳も111mと伊勢地方最大の前方後円墳である。また車駕之古址古墳は当該地で中期としては最大を誇り、御塔山古墳も造り出しをもつ直径70mの巨大な円墳である。なかには小さな古墳も含まれるが、栗塚古墳と狼塚古墳はともに誉田御廟山古墳(応神陵古墳)の陪塚と考えられている。また一ヶ塚古墳のある長原古墳群の被葬者は近隣遺跡の先進的な技術者であり、畿内政権による組織的な集団であ

遺 跡 名	所在地	墳 形	墳丘長 (m)	造り 出し	集成 編年	時 期	出 土 地 点	個体数	形態	家形埴輪 (図み内)	木桶形 土製品	備 考	文献 番号
赤堀茶臼山古墳	群馬県	帆立貝形古墳	59		7	5世紀中葉	墳頂?	1	(b)				(1)
経ヶ峰1号墳	愛知県	帆立貝形古墳	35		7	5世紀後半	南西側くびれ部	1		有		朱付着	(2)
石 山 古 墳	三重県	前方後円墳	120	有	4	4世紀末	東方外区(括れ部に接する 方形の外区)、墳頂	5以上	(a)or (b)				(3)
宝塚1号墳	〃	前方後円墳	111	有	4	5世紀初頭	北側の造り出しと墳丘の 谷部	3	(a/b)	有(1)	有A	1個体は内部に井戸形土製品を有する家形埴輪を置く	(4)
倉谷古墳	〃	前方後円墳	22.5		8	5末～6世紀初頭	前方部上面の土坑	1				導水孔らしき透かしが穿たれている、須恵質	(5)
一ヶ塚古墳	大阪府	円墳	47.4	有	4	5世紀後半	造り出しと墳丘の谷部周 辺～周濠	1	(b)?				(6)
野中宮山古墳	〃	前方後円墳	154	有	5	5世紀前半	南側造り出し付近				有A		(7)
心合寺山古墳	〃	前方後円墳	157	有	5	5世紀前半	造り出しと墳丘の谷部、墳頂	3	(c)	有(1)			(8)
狼塚古墳	〃	円墳	28	有	6	5世紀中葉	造り出し北側のくびれ部 に近い部分	1	(c)		有B	8個の箱形で埴輪を構成する。 誉田御廟山古墳の陪塚	(9)
栗塚古墳	〃	方墳	43		6	5世紀中葉	濠内					誉田御廟山古墳の陪塚	(10)
野 中 古 墳	〃	方墳	37.5		7	5世紀中葉	墳頂中央部(原位置に近い)	1	(c)			誉田古墳の陪塚?、朱付着	(11)
前野山古墳	〃	前方後円墳	190	有	7	5世紀後半	外堤						(12)
鞍塚古墳	〃	帆立貝形古墳	48	有	7	5世紀後半	周濠内	2?	(c)			周濠内出土と同一個体が古墳西側の埴輪棺墓 に転用。狼塚と同じ箱形の図み形か? 朱付着	(13)
太平寺5号墳	〃	円墳	13.2		8	5世紀末～6世紀	埴輪列北(東裾部)	1					(14)
交野車塚古墳群	〃	—	—	—	—	—						5世紀末～6世紀前半の5基の古墳有り	(15)
市 庭 古 墳	奈良県	前方後円墳	200	有	5	5世紀前半	後円部北西調査区	1					(16)
ナガレ山古墳	〃	前方後円墳	90		5	5世紀前半	くびれ部の墳頂部				有		(17)
乙女山古墳	〃	帆立貝形古墳	130	有	5	5世紀前半	造り出し部分						(18)
五条猫塚古墳	〃	方墳	37.4		7	5世紀後半	墳頂部	1	(c)		有		(19)
安部山1号墳	〃	前方後円墳	30.3			6世紀	埋葬施設の排水溝蓋に転用	1				2次的な移動、近辺の古墳で使用か?	(20)
西大寺ヶ丘遺跡	〃	—	—	—	—	—		1					(21)
内田山A2号墳	京都府	方墳	12		5	5世紀前半	濠内	1				円形の透かし有り	(22)
行者塚古墳	兵庫県	前方後円墳	99	有	5	5世紀前半	東及び西の造り出しと墳 丘の谷部	2	(a/b)	有(1)	有A		(23)
車駕之古址古墳	和歌山県	前方後円墳	84	有	7	5世紀中葉	くびれ部付近周濠	1	(c)				(24)
金蔵山古墳	岡山県	前方後円墳	165		4	4末～5世紀初頭	墳頂	1			有A		(25)
月の輪古墳	〃	帆立貝形古墳	60		5	5世紀前半	墳頂	1	(a)or (b)		有A		(26)
拝塚古墳	福岡県	前方後円墳	70		4	4末～5世紀初頭						古墳は前方部の側縁が張り出し、陸橋を有す	(27)
御塔山古墳	大分県	円墳	70	有	5	5世紀前半					有A		(28)
野毛大塚古墳	東京都	帆立貝形古墳	68	有	7	5世紀中葉(第2 主体の時期)	第2主体部	—			有A (石製 品)	図み形埴輪は出土していないが、木桶形土製 品が出土。また櫛形埴輪が造り出しを廻る	(29)

表1 図み形埴輪出土遺跡一覧

ったため誉田白鳥窯や土師の里窯から埴輪が供給されていることが指摘されている¹³。このように大王墓に次ぐ規模をもつ古墳は地域の首長墳か、あるいはそれに近い人物の古墳が多く含まれていることがうかがわれる。また、御頭山古墳などは単独墳であることから畿内政権と関係の深い人物の古墳であることが推定される。

形象埴輪は4世紀後半以降、畿内において成立し、畿内および畿外に影響を与えていく。こうした畿内的な形象埴輪の波及は全体的ではなく限定されると指摘されており¹⁴、図み形埴輪が出土している古墳で畿外の古墳はいずれも畿内的な埴輪体系の強い影響下にあるとされる。金蔵山古墳は埴輪の種類、配

古 墳 名	所在地	朝顔	家	盾	靱	蓋	甲冑	鳥	他	古 墳 名	所在地	朝顔	家	盾	靱	蓋	甲冑	鳥	他
赤堀茶臼山古墳	群馬県	○	○			○	○	○	○	交野車塚古墳群	大阪府	○	○	○		○	○		○
経ヶ峰1号墳	愛知県	○	○	○		○	○		○	五条猫塚古墳	奈良県		○			○			○
宝塚1号墳	三重県	○	○	○	○	○	○		○	安部山1号墳	〃								
石山古墳	〃	○	○	○	○	○	○	○	○	市庭古墳	〃	○		○		○			
倉谷古墳	〃									ナガレ古墳	〃		○	○					
野中古墳	大阪府	○				○	○	○	○	乙女山古墳	〃	○	○			○			
一ヶ塚古墳	〃	○	○	○	○	○	○	○	○	内田山A2号墳	京都府	○	○						
狼塚古墳	〃							○		行者塚古墳	兵庫県	○	○	○	○	○	○		○
野中宮山古墳	〃	○	○	○		○		○	○	車駕之古址古墳	和歌山県	○	○	○		○			
前野山古墳	〃	○	○	○		○			○	金蔵山古墳	岡山県	○	○	○	○	○	○	○	○
心合寺山古墳	〃	○	○	○	○	○	○	○	○	月の輪古墳	〃		○	○	○	○	○		
鞍塚古墳	〃	○	○	○		○	○	○		御塔山古墳	大分県	○	○	○		○			
栗塚古墳	〃		○	○		○			○	拝塚古墳	福岡県	○	○	○	○	○			
太平寺5号墳	〃	○				○				野毛大塚古墳	東京都	○	○					○	○

表2 埴輪組成一覧

列ともにそれを見いだすことができるとされる。表2をみれば埴輪の種類のみを考えても囲み形埴輪が出土する古墳は畿内的な埴輪体系を備えており、畿内と結びつきが深いことがわかる。

C) 時期

前方後円墳集成の編年¹⁵に基づいて各古墳の時期を概観すると4期—金蔵山古墳・石山古墳・拝塚古墳・宝塚1号墳・一ヶ塚古墳、5期—野中宮山古墳・行者塚古墳・ナガレ山古墳・乙女山古墳・市庭古墳・月の輪古墳・御頭山古墳・心合寺山古墳、6期—栗塚・狼塚古墳、7期—野中古墳・赤堀茶臼山古墳・車駕之古址古墳・前野山古墳・鞍塚古墳・五条猫塚・経ヶ峰1号墳・野毛大塚古墳(第2主体部)、8期—倉谷古墳・太平寺5号墳となり、5期～6期に集中していることがわかる。年代については4期を4世紀末～5世紀初頭、8期を5世紀末葉とした時、5期は5世紀前半、6期と7期の一部が5世紀中葉に相当する。すなわちこの時期が囲み形埴輪の最盛期といえる。7期の野毛大塚古墳では囲み形埴輪を配置せずに主体部に木樋形石製品だけを副葬するなど、囲み形埴輪に付加されていた象徴性に变化があったことが推定され、8期になると囲み形埴輪はすでに埴輪祭祀のなかでその位置を失って、倉谷古墳などごく一部で残存するだけになる。

このように囲み形埴輪はほぼ5世紀代を中心とする期間に使用されていたことが確認できた。

D) 個体数

詳細が公表されていないものが多いが、三重県石山古墳、同県宝塚1号墳、大阪府心合寺山古墳、兵庫県行者塚古墳で複数個体が出土している。石山古墳は5個体以上、宝塚1号墳3個体、心合寺山古墳3個体、行者塚古墳2個体である。

E) 形態

平面形態は方形あるいは長方形ものと鉤の手形の張り出し部を有するものに大きく分けることができる。そして囲み形埴輪の特徴として壁面中央付近に突帯が1～3条巡ることと、壁面上部を飾る剣先状突起を挙げることができる。(a)剣先状突起が無いもの、(b)入口上部につくもの、(c)全体につくものに分類される。遺存状態の不良なものが多いが敢えて分類すると次のようになる。

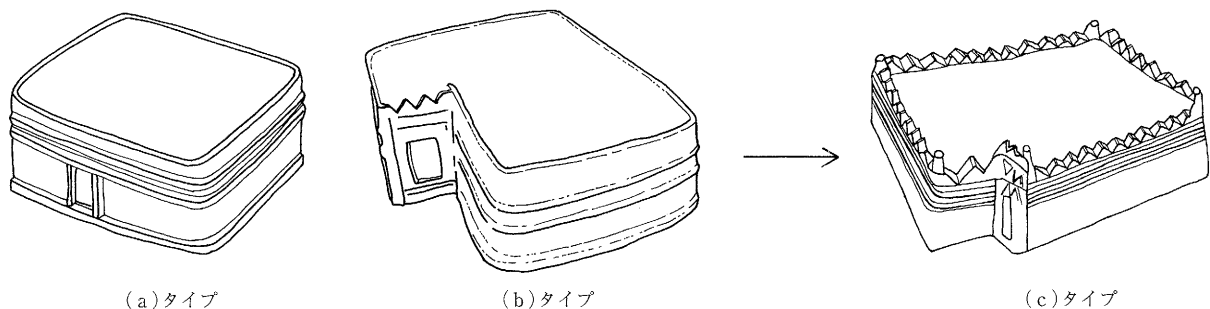
(a)グループ 行者塚古墳(西造り出し出土)、宝塚1号墳

(b)グループ 行者塚古墳(東造り出し出土)、宝塚1号墳、赤堀茶臼山古墳、一ヶ塚古墳?

(a)・(b)が明確ではないグループ 石山古墳、月の輪古墳、

(c)グループ 鞍塚古墳、狼塚古墳、車駕之古址古墳、心合寺山古墳、野中古墳、五条猫塚古墳

このようにみると(a)・(b)から(c)への形態変化を見いだせることができるかもしれない。(a)・(b)から(c)への変化は剣先状突起だけでなく、壁面の板状表現(車駕之古址古墳)、柱の表現(心合寺山古墳)、箱状の埴輪(狼塚古墳)等写実的であり、シンプルなものから豊かな表現力を発揮したものへの変化ととらえることができる。ただし、赤堀茶臼山古墳等これに当てはまらないものもある。



第36図 囲み形埴輪変遷概念図

F) 出土位置

原位置を留めていた資料は経ヶ峰1号墳、宝塚1号墳、石山古墳、狼塚古墳、心合寺山古墳、行者塚古墳である。また原位置に近い資料としては野中古墳がある。金蔵山古墳は出土位置の復元がされている。これら以外は大半が小片で、2次移動しているがそれでもおよそその位置を想定することができ、大きく分けると墳頂部と造り出し周辺(くびれ部・墳丘裾部)に限定される。

- I. 墳頂部……………石山古墳、金蔵山古墳、心合寺山古墳、月の輪古墳、野中古墳、五条猫塚?
- II. 造り出し……………石山古墳(東方外区)、乙女山古墳
- III. 造り出しと墳丘の谷部……………宝塚1号墳、行者塚古墳、心合寺山古墳、狼塚古墳
- IV. くびれ部～造り出し付近……………一ヶ塚古墳、野中宮山古墳、ナガレ山古墳、車駕之古址古墳
- V. その他……………赤堀茶臼山古墳〈墳頂?〉、栗塚古墳・鞍塚古墳〈濠内〉、前野山古墳〈外堤〉

太平寺5号墳〈墳丘を廻る埴輪列?〉、市庭古墳〈後円部北西部〉、倉谷古墳〈前方部土坑〉

囲み形埴輪が出現する4世紀末は同時に造り出しにおける祭祀が定形化する時期でもあり、囲み形埴輪もここでの埴輪祭祀の構成要素となっている。II・III類と、原位置をとどめていないIV類が造り出し周辺での出土である。I類については造り出しをもたない金蔵山古墳や方墳である野中古墳や五条猫塚古墳とともに、墳頂と造り出し周辺の両方に埴輪を有する石山古墳と心合寺山古墳が含まれている。これは両方で埴輪祭祀が行われていたこと示すが、囲み形埴輪の個体数は造り出し周辺のほうが多く、囲み形埴輪を用いる古墳祭祀の比重は造り出し周辺が主体となっている。さらに原位置を留めて検出されたのはいずれもIII類であることから、造り出しと墳丘の谷部あるいは前方部と後円部のくびれ部が基本的な囲み形埴輪の配置場所と考えられる。

宝塚1号墳は造り出しの東側に1個体、西側には2個体配置していたが、東側の囲み内には木樋形土製品を有する家形埴輪が配置されており、西側の2個体うちの1個体には井戸形土製品と推定される筒状土製品を伴っていた。

狼塚古墳はくびれ部で土した。埴輪の周囲には2～3列の石が敷かれ、8個の箱形からなる囲み形埴輪内部には玉石を敷き、木樋形土製品を置いていた。囲みの入口、導水の方法は墳丘を向いていない。

行者塚古墳は4つの造り出しを有するがこのうち西造り出しと後円部の谷部に川原石を敷きその中央部に囲み形埴輪を据えていた。入口は谷部を向いていたようである。また、東造り出しと後円部の谷部は囲み形埴輪とその内部に家形埴輪を置いた後、川原石を敷いていた。

心合寺山古墳は造り出しと後円部との谷部の傾斜地に大小の石によって区画をつくり、囲みと導水の入口を造り出しに向けて配置する。

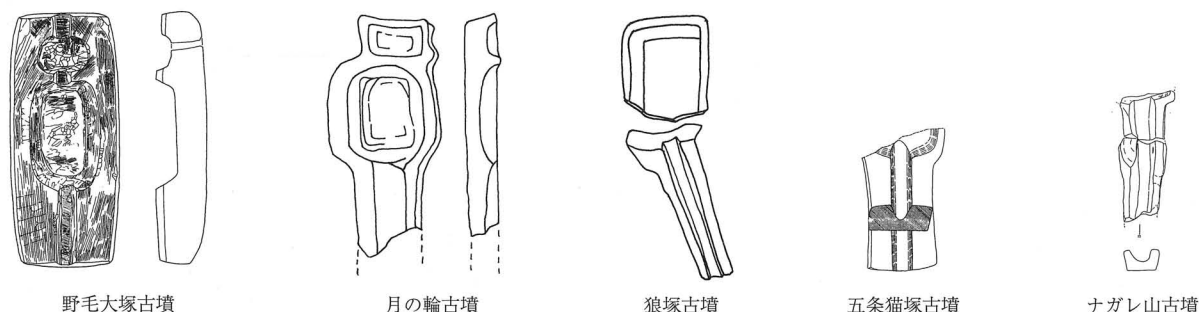
これらのような谷部への配置は実際の祭祀場所を意識したものと考えられる。これについては後述する。また、造り出しと墳丘との接点という角にあるが、これは金蔵山古墳の南区画の角に配置されていたことと共通する。現時点では明確ではないが、祭祀上の意味を持つものかもしれない。

G) 共供遺物

家形埴輪が囲み内に置かれていた例が経ヶ峰1号墳、行者塚古墳、心合寺山古墳、宝塚1号墳など4例あげられる。経ヶ峰1号墳は切妻造りで屋根に堅魚木をのせ、棟には鱗形の連続線刻文を施している。行者塚古墳は2間×2間に復元され、切妻造りの棟に5本の堅魚木を乗せ、うち2本には鶏を飾る。心合寺山古墳は切妻造りで、堅魚木は乗せていない。平側は無紋であるが、妻側には2本の柱を線刻しており、上部に透かしがある。宝塚1号墳は切妻造りで堅魚木は乗せていない。妻側は2間である。このように囲み形埴輪の内部から出土する家形埴輪は堅魚木や装飾については相違もあるが、いずれも切妻造りで、柱間については妻側2間である。

木樋形土製品は1988年に狼塚古墳で木樋形土製品と解されるまでは不明形象埴輪、不明土製品、舟形土製品等と呼称されてきた。おそらく囲み形埴輪が出土している古墳には遺存している可能性があり、今後資料の見直しから確認例が増えることが予想される。浄水祭祀において最も重要な位置を占める浄

水装置を表しているものと考えられており、槽である凹部と樋である溝状部分からなっている。凹部は1つのものと2つのものがあるが、これについては両者の比較のなかで述べる。現在、出土が判明しているのは宝塚1号墳、狼塚古墳、野中宮山古墳、ナガレ山古墳、行者塚古墳、五条猫塚古墳、月の輪古墳、御頭山古墳、野毛大塚古墳である。このうち原位置を留めていたのが宝塚1号墳、狼塚古墳で、行者塚古墳は囲み形埴輪の周辺で見つかった。囲み形埴輪の出土していない野毛大塚古墳は第2主体部から出土しており、土製品ではなく石製品である。そして土製品は出土していないが、心合寺山古墳は家形の床を長方形に開けることによって浄水装置を表しているものと考えている。



第37図 木樋形土製品(浄水装置)集成図(狼塚は写真からトレース)

他に筒状土製品が宝塚1号墳で出土している。これは井戸を表している土製品と考えられ、水の祭祀のひとつである湧水祭祀に関連した遺物と推定される。現時点では類例がなく、囲み形埴輪と共伴することが普遍的かどうかは判断できないが、囲み形埴輪の性格を考えていく上で重要な資料である。筒状土製品は楕円あるいは(長)方形の囲み形埴輪とともに出土しており、鉤の手形の囲み形埴輪との使い分けがあったことが推定される。

H) 囲み形埴輪についてのまとめ

以上が表1からみられる囲み形埴輪についての様相である。ここで再度整理しておきたい。

出土地点……………九州から中部地方まで広い範囲で出土しているが、現時点では中部以北では確認されていない。

墳丘形態……………前方後円墳、帆立貝形古墳、方墳、円墳など多岐に富むが、方墳以外は造り出しを伴う。(金蔵山古墳・拝塚古墳を除く)畿外あるいは畿内においては地域首長の系譜に連なるとみられる古墳が多く、また畿内中枢部では大王墓の陪塚あるいは王権と密接な関係にあったと考えられる古墳が含まれる。

時 期……………4世紀末葉から5世紀末葉まで出土するが、5世紀前半～中葉に最も出土例が多くなる。5世紀中葉以降減少し、野毛大塚古墳のように木樋形土製品だけが主体部に副葬されるなど、囲み形埴輪の象徴性に変化が現れる。

個 体 数……………石山古墳や宝塚1号墳、心合寺山古墳、行者塚古墳などは複数個体を確認しているが、他の古墳では大半は碎片であるため1個体と判断している。しかし、調査範囲や遺存状況によるところが大きく、残りのよい上記4基の古墳から考えれば本来複数個体が配置されていたと推定される。

形 態……………平面形態は鉤状の張り出しのあるものとないものに分けられる。また特徴としては壁面に施された1～3条の突帯と壁上部の剣先状突起をあげることができる。剣先状突起は付かないものあるいは入口上部にのみ付くものと、全体をめぐるものに分割ことができ、前者から後者への変化を追うことができる。

出土位置……………埴輪頂部と造り出し周辺に限定されるが、造り出しを有する古墳についてはほぼ造り出し周辺が主体となっている。また、埴輪頂と造り出しの両方に配置する古墳もあるが、個体数において造り出しが優る。これは埴輪祭祀が埴輪頂部から造り出しへの移

行時期であることに起因すると考えられるが、原位置を留める埴輪は墳丘と造り出しの谷部で検出されていることから、方墳を除いては谷部が基本的な埴輪の配置場所といえる。これは実際の祭祀場所との関連性がある。

共伴遺物……………家形埴輪と木樋形土製品などが出土している。家形埴輪出土例は4例を数え、そのすべてが切妻造りで、妻側の柱間は2間で構成されている。おそらくこれが浄水装置の覆屋の基本的な形であったと考えられる。木樋形土製品については28古墳中9古墳で見つかり、心合寺山古墳の床の切取りを浄水施設と考えると10古墳になる。今後の再検証により個体数は増えるであろう。また、宝塚1号墳からは井戸を表した可能性のある筒状土製品が出土しているが、楕円あるいは(長)方形の囲み形埴輪と共伴しており、鉤の手形を呈する囲み形埴輪との使い分けが推定される。

3. 浄水祭祀遺跡について

これまで埴輪とその出土古墳から心合寺山古墳出土埴輪との関連性を概観してきた。次に埴輪が表現している導水施設について実際の遺跡を検討する。また水の祭祀は井戸や水源地を対象とする祭祀と河川や水源地から水を引き濾過のための浄水施設で祭祀を行う祭祀に大きく分けられている。祭祀については様々な名称が用いられているが、ここでは前者を湧水祭祀、後者を浄水祭祀と区別する。心合寺山古墳出土埴輪は導排水施設をもつことから浄水祭祀を表現しているものと考えられ、ここではそのよう

図版 番号	遺 跡 名	所在地	時 期	遺 構 名	地 形 お よ び 環 境	導水施設の構成 (【 】は一水造りを表す)	備 考 ・ 出 土 遺 物	浄水施設 型式	参考 文献
1	纏向遺跡(家 ツラ地区)	奈良県	3世紀末～ 4世紀初頭	導水施設	渋谷山古墳が造営されている尾根と珠城山古墳群が造営されている尾根に挟まれる西に開けた浅い谷地形の入口部	板で囲んだ石敷遺構→ 槽→樋管→素掘り溝	導水施設をつくるために整地作業を行っているが、これ以前にはあった溝からも弧紋板や木製品が出土する等祭祀の場と考えられる。	纏向型	(29)
6	南郷大東遺跡	〃	5世紀前半	導水施設	金剛山東麓を流れる小河川によって形成された扇状地上の尾根の急斜面	貼土施設(ダム)→木樋 1→木樋→【槽/木樋 2】→木樋3	浄水施設周辺では遺物は出土していないが、他の場所で木製品は約2千点が出土。農具や織機具、楽器建築部材等、赤色顔料を施した容器や武器形木製品がある。	南郷大東型	(30)
—	大柳生宮ノ前 遺跡	〃	5世紀後半 ～末	木樋を伴う 導水施設	丘陵の南側、標高280～290m付近で南南西から北へ流れる自然河川の中州	取水溝→堰→【樋/槽/ 樋】	壺などをかたどったミニチュア土器約100点が出土、刀形の木製品	浅後谷南型	(31)
—	磯野北遺跡	〃	4世紀前半	—	南西から北西方向にのびる自然河道によって東西を分断された微高地を巡る溝	—	微高地には玉造工房が存在する。溝からは土器とともに農耕具や椅子形木製品が出土	—	(32)
7	阪原阪戸遺跡	〃	5世紀	石組井	北向きの斜面地で、北側には西方より流れ来る白砂川が大きく屈曲する場所	水源→樋→石組井→3 号石組→2号石組→1 号石組	水源地および石組集積遺構周辺では遺物出土していないが、下流の3基の石組遺構周辺で白玉や土玉、白雲母片、焼骨が出土。	阪原阪戸型	(33)
2	服部遺跡	滋賀県	古墳前期	導水施設	野洲川の旧北流と南流の分岐点の湖岸側に位置し、自然堤防が作り出した微高地から湖岸に向かって勾配となる	方形杭列→素掘り溝→ 板組溝→堰→【槽/樋】	木樋周辺には敷石がされており、上屋があったと想定されている。方形杭列、木樋周辺から祭祀遺物は出土していないが河道内は土器、木製品が出土	服部型	(34)
3	瓦谷遺跡	京都府	4世紀前半 ～中葉	自然SD9010	平城山丘陵の北西側斜面の裾部に形成された扇状地も連なる谷地形	【樋/槽/樋】	2基が見つかるが、自然河川内より出土であり、原位置を留めていない。	浅後谷南型	(35)
4	浅後谷南遺跡	京都府	4世紀前半	導水施設2 (上流)	谷地形が入り組み、谷地形と微高地が連続する形成する丘陵裾部	堰状施設→板材(樋)→ 槽	土師器、剣形木製品が出土。	纏向型	(36)
5	〃	〃	4世紀前半	導水施設1 (下流)	〃	堰状施設→【槽/槽/ 樋】	施設は2次的な移動を受けている。土師器、刀装具、円盤状木製品が出土し、下流域では鳥形木製品、舟形木製品が出土。	浅後谷南型	〃
—	神並・西ノ辻 遺跡	大阪府	5世紀後半	水利施設	扇状地の緩斜面に位置し、扇状地面を下刻した開析谷。標高15～12m	【槽/樋】→板組暗渠→ 貯水池列→水槽→【槽/ 樋】→溝	浄水施設には覆屋があったとされる。水利遺構に伴って5世紀後半の須恵器蓋杯、有蓋高杯、壺、土師器壺、甕が出土。また上流では唐持人物埴輪が2個体出土	南郷大東型	(37)
8	本位田遺跡	兵庫県	古墳前期	石組集水遺 構	台地上の西側斜面で、佐用川左岸の北から南に向かってのびる尾根の突端部付近128m付近	取水溝→石組集水遺構	石組内には建築部材と思われる板材あった。	阪原阪戸型	(38)
9	三ツ寺I遺跡	群馬県	5世紀中葉	1号石敷遺 構	榛名山の東南麓末端の緩傾斜低丘陵地帯、意野川の支流である猿府川が開析した低台地上	橋梁遺構(樋)→1号石 敷遺構→2号石敷遺構	1号石敷は3面を塙によって囲まれている。破砕された土器や滑石製模造品が出土。	三ツ寺I型	(39)

表3 古墳時代浄水祭祀遺構一覧

な遺跡11例を対象とした。ただし、祭祀の観念的な部分については取り扱わない。

A)所在地

群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡以外は畿内およびその周辺に集中している。なかでも奈良は5遺跡と最も多く、大阪を加えると5割を越す。京都では浅後谷南遺跡、瓦谷遺跡の2遺跡、滋賀県は服部遺跡、兵庫県では本位田遺跡などがある。

B)導水施設の構成要素

導水施設は河川や溝、水源地から水を引き、貯留や堰によって濾過し、堰と槽と樋から成る浄水装置によって浄水を得るための一連の遺構を総称するものである。しかし、これには様々な形態がある。ここでは各遺跡の導水施設についてその構成要素を中心にみていく。施設についての名称は、報告されている記載に従う。

纏向遺跡・・長さ1.9m、幅63cm、深さ約15cmの平面長方形を呈する槽の長辺を東西方向にして集水枡としている。また、南側には板材で四方を囲んだ石敷遺構があり、整地面より開掘された溝1から引いた溝を濾過している。槽の四方には刳り込みがあり、北側は樋が調査区外にのび、東側は樋が残っていないため不明であったが、南側の樋は隣接する石敷遺構につながっており、ここから取水していたようである。そして槽からオーバーフローした水が西の樋へ流れる構造となっている。この西の樋は一部暗渠となっているが、槽と樋が接した部分は河原石を足場状に敷いており、ここで完形に近い壺や甕がまとまって出土している。

浅後谷南遺跡・・上流(導水施設2)と下流(導水施設1)で2基の導水施設が検出されている。上流では4本の杭で板材を固定した堰状施設に直行する板材を通して水が長さ91cm、幅16.6cm、高さ14.7cmの把手付槽に流れる仕組みになっている。近くには梯子が見つかっており、水を汲むために利用されたものと推定されている。下流では一木造りで全長さ3.5m、槽部の長さ1.1m、幅60cm、深さ10cmの木樋が用いられている。槽の前後は絞こまれて樋管となっている。これを杭で固定し、上流側に横板を杭で留め堰としている。横板上部には水が樋管に落ちるように半円形に挟られている。木樋北側には足場用の板が設置されている。また、4m下流で梯子などが見つまっている。

瓦谷遺跡・・S D 9010とこれが合流するS D 9007からなる自然河道から木樋が2基見つかるがいずれも現位置を留めてはいない。木樋1は残存長247cm、幅25～30cmで、幅15、深さ5cmの溝を内掘りしている。中間部に直径60cm、短径25cmの槽を設けている。木樋2は残存長200cm、幅29～32cmで、幅12cm、深さ7cmの溝を彫りこんでいる。槽部は隅丸長方形で長さ30cm、幅27cm、深さ11cmである。

磯野北遺跡・・住居のある微高地を廻る溝で出土している。溝は自然河道から引き入れており、河道によって東微高地と西微高地に分断され、西微高地では滑石の臼玉が作られていた。また、溝から南は集落外と推定されている。木樋は矢板で切断されており、本来の形状は不明である。木樋以外に土器、農耕具や鍬形木製品などが出土している。

服部遺跡・・幅60m以上、深さ4m前後の河道Aに築かれており、方形杭列と木樋(浄水装置)を設置した石敷遺構が素掘り溝でつながっている。素掘り溝から2枚の板を横に立てて作った樋から水が木樋に流れるようになっている。木樋と板組溝との間には板材を樋に直行させて堰を設けている。木樋は長さ4m、最大幅60cmの一木造りで、槽に樋が取りつく形状となっている。なお、木樋の周囲には簡易な上屋があった可能性が指摘されている。

南郷大東遺跡・・導水施設は。貼石施設(ダム)、Ⅱ木樋1、Ⅲ木樋、Ⅳ木樋2(覆屋、垣根状施設)、Ⅴ木樋3の5つから構成されている。Ⅳが浄水施設で、長さ4m、幅90cmの大型の木樋と2間×2間から覆屋、そしてこれを囲う垣根状施設からなっている。木樋の槽部は長さ90cm、幅70cm、深さ15cmである。木樋の北側2枚、南側に1枚板が敷かれている。垣根状施設は計4cmの杭を30～40cm間隔で並べ、東西4.6m、南北4.9mの隅丸方形を呈し、北側に1.3m張り出し部分を持ち、鉤の手状になっている。

大柳生宮ノ前遺跡・・・幅10mの河川の中州で検出された。木樋は全長2.16mで、幅20cmの樋の中央に幅40cm四方、深さ8cmの槽部をくり抜いている。上流側から取水溝を通して水を引き入れ、堰板でせき止めた後、木樋に流す構造となっている。

神並・西ノ辻遺跡・・・開析谷を利用して東西100mにわたって配置された水利施設が造られている。浄水のための木樋は上流と下流に設置され、長方形の板材の端に槽部を設け、水が流れるように樋を掘っている。いずれも覆屋が伴っていたと考えられている。この施設の間には板組暗渠と樋管によって連結している4基の石貼貯水施設がある。

阪原阪戸遺跡・・・全長80m、幅6～10m、深さ1.6mの南北方向の溝で検出された。角礫を配した水源部から15m下流の石組枳(内法65cm×95cm、深さ50cm)に樋を通して流れ込み、砂と石組によって濾過されて、排水口から流れ出る構造となっていた。下流には3基の石組遺構があり、この石組周辺で土器や滑石製模造品が出土している。

本位田遺跡・・・幅20mの溝状遺構の地山を東西1.6m、南北1.8m、深さ30cmの大きさに掘り込み、角礫と河原石を方形に組み合わせた石組集水遺構が検出された。北東角には短い溝が取りついており、集水の機能を果たしたとされ、南側には溝にのびる浅い掘りこみがある。遺構西側には石敷があり、作業的な場と考えられている。

三ツ寺Ⅰ遺跡・・・環濠をもつ豪族居館内に2ヵ所の石敷遺構が検出された。館外から橋梁遺構(樋管)を通して水を引き入れ、1号石敷遺構の河原石で囲った長方形の枳に流れ込み、溢れた水が溝を通じて2号石組に流れる構造となっている。周囲には祭祀を行ったとされる大型掘立柱建物や井戸が存在する。

C) 地形および環境

居館とされている三ツ寺Ⅰ遺跡と河川が作りだした自然堤防の微高地上にある服部遺跡以外は尾根や谷地形の傾斜面に位置している。このため、周辺には居住域を見いだすことはできない。むしろ居住域と離れた場所に施設を設置しているようである。

D) 時期

纏向遺跡では浄水施設に水を引く溝が布留0式から1式にかけて使用され、槽内に布留1式の土器が残されていることから3世紀末～4世紀初頭に用いられていたと考えられている。

浅後谷南遺跡の浄水施設1では槽埋土や木樋周辺埋土から布留式土器が出土し、また浄水施設2でも施設埋没土層から布留式甕が出土していることから4世紀前半に比定される。

瓦谷遺跡の木樋は溝埋土からの出土である。埋土は布留式併行期とされており、4世紀前半から中葉に比定される。

服部遺跡では河道から出土した土器によって古墳時代前期とされている。

南郷大東遺跡では河川を改修して導水施設を設置しているが、改修前の川底、整地土内および廃絶後の埋土のいずれからも5世紀前半の土器が出土している。

磯野北遺跡は木樋が出土した溝の上部層からは布留1式、下部層からは布留2式の土器が出土しており、4世紀前半に位置づけられる。

大柳生宮ノ前遺跡では導水施設周辺では壺形のミニチュア土器が多数見つかり、須恵器なども出土している。5世紀後半頃の施設とされている。

阪原阪戸遺跡では水源部から石組枳まではほとんど遺物は出土せず、石組枀から1号石組までの40mの範囲で遺物が出土しているが、1号石組でTK73型式併行期の須恵器甕や杯身、土師器高杯、埴が出土し、2号石組ではTK47型式併行期の須恵器杯身、土師器杯が出土している。こうしたことから浄水施設の稼働時期は5世紀とされている。

神並・西ノ辻遺跡では貯水池から5世紀後半に比定される須恵器蓋杯、有蓋高杯、甕や土師器壺、杯、高杯が出土し、遺構を覆う堆積土からは6世紀初頭の遺物が出土していることから5世紀後半～末に機

能していたとされている。

三ツ寺Ⅰ遺跡の1号石敷遺構の上面に多量の破碎した遺物が出土しているが土師器杯、高坏が50%を占める。また、須恵器の甕、高坏等も出土している。5世紀第3四半期から第4四半期に相当する。

本位田遺跡では石組集水遺構からのびる溝1で弥生時代後期から布留式土器が出土し、底部に布留式併行期の土器が密着して出土している。このため、布留式期の溝の使用は認められるが、使用開始年代は明らかではないとされている。しかし、布留式併行期の土器の出土から4世紀～5世紀にかけては使用されていたことは指摘できよう。

以上、各導水施設の時期をみてきた。最も古いものは3世紀末～4世紀初頭に位置づけられる纏向遺跡である。以後検出例が増え4世紀代は浅後谷南遺跡、服部遺跡、磯野北遺跡、瓦谷遺跡、本位田遺跡、5世紀代は南郷大東遺跡、神並・西ノ辻遺跡、阪原阪戸遺跡、三ツ寺Ⅰ遺跡、大柳生宮ノ前遺跡等がある。このように導水施設は4世紀初頭から5世紀末にかけて使用されていることがわかった。

E) 浄水装置について

浄水装置は浄水を得るための最終的な沈殿と濾過を行う部分である。覆屋や囲み状施設を有することから施設の中心を成し、祭祀を執行了場所と考えられる。浄水装置は木製と石製の二つのタイプがある。浅後谷南、服部、南郷大東、大柳生宮ノ前遺跡等の木製タイプの基本的な構成要素は堰部、槽部、木樋部である。石製タイプは地面に石材を組んだもの、地面を掘り込んで底に石を敷くものがあるが、基本的に槽部と樋部(溝)からなる。

浄水装置のうち槽部と樋部には幾つか形態があり、おおよそ次のように分類できる。

纏向型・・・槽部と樋部を別々に作り、槽部に接合して浄水装置としたもの。

類例——纏向遺跡、浅後谷南遺跡(浄水施設2)

浅後谷南型・・・槽部と樋部を一木造りとし、樋部の中心に槽部をくり抜いたもの。

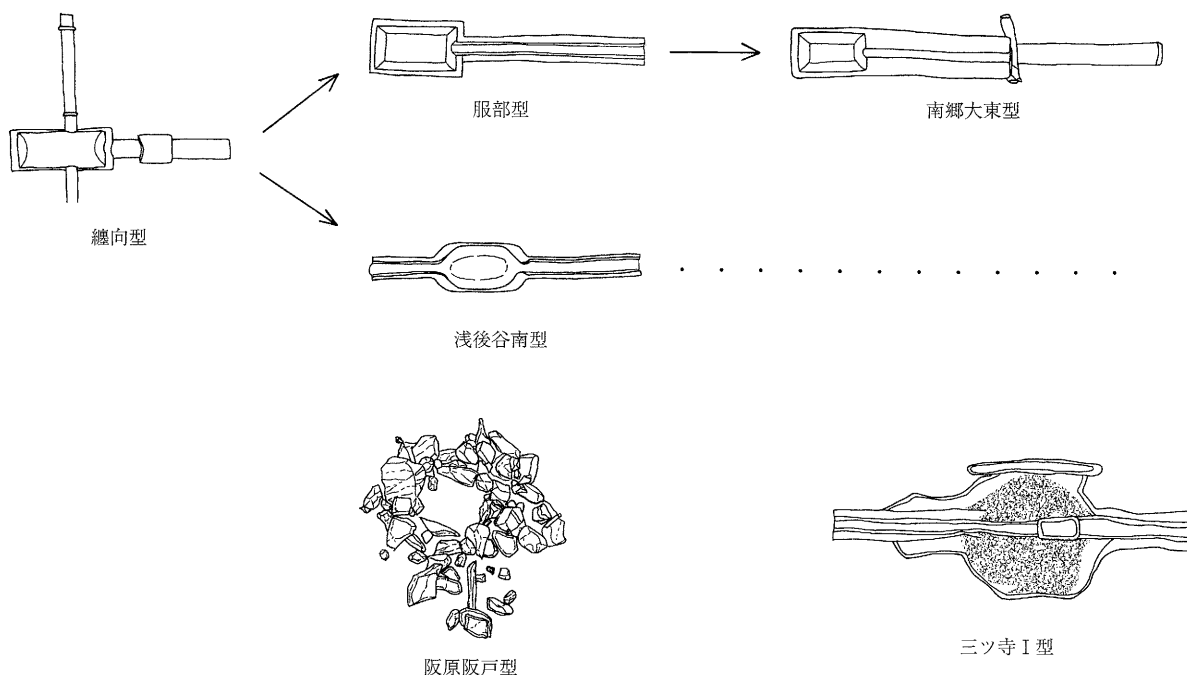
類例——浅後谷南遺跡(浄水施設1)、瓦谷遺跡、大柳生宮ノ前遺跡

服部型・・・槽部と樋部を一木造りとし、槽部を端にくり抜いたもの。

類例——服部遺跡

南郷大東型・・・板材に溝を彫り込んで樋部とし、端に槽部をくり抜いたもの。

類例——南郷大東遺跡、神並・西ノ辻遺跡



第39図 浄水装置変遷図

阪原阪戸型・・・石材を組んで柵状につくって槽部としたもの。

類例——阪原阪戸遺跡、本位田遺跡

三ツ寺Ⅰ型・・・溝の周囲に石を張り、中央を柵状に掘りくぼめ石を張ったもの。

類例——三ツ寺Ⅰ遺跡

最も古い形態は槽部と樋部を別々に作り、接合する纏向型で4世紀代にみられる。次に服部型と浅後谷南型のように槽部と樋部が一木で作られる。しかし、次の段階では南郷大東型のように樋部を削り出さずに板材のまま、溝を彫り込むという簡略化が進む。また、併行して石組を柵状にした阪原阪戸型も存在するが類例も少なく分類が難しいが、これの整った形態を三ツ寺Ⅰ型としておく。このように考えることができるなら、浅後谷南遺跡の2基の浄水施設は時期差があるかもしれない。

F)まとめ

遺跡から得られたことを簡単にまとめて、若干の補足を行っておく。

所在地・・・畿内およびその周囲に集中しているが、奈良は5遺跡と最も多い。また検出件数では京都は2遺跡で4基の浄水装置が見つかった。このように浄水祭祀は畿内が発祥と考えてよいかもしれない。唯一、関東地方にある三ツ寺Ⅰ遺跡も畿内政権と密接な関係にあったと指摘されているおり、畿内から祭祀が伝わったと推定される。

導水施設・・・導水施設は河川あるいは溝から水を引き入れ、堰を通して槽と樋からなる浄水装置に導くもので、沈殿と濾過を繰り返すようになっている。最終的に槽で浄水を得ることを目的とするものである。これが施設の基本形態であるが、神並・西ノ辻遺跡では2基の装置の間に4基の貼石された貯水池が構築される巨大なものであり、畿内中枢における導水施設の様子がうかがえる。

南郷大東遺跡では浄水装置に覆屋とそれを囲う施設が検出されており、神並遺跡でも2基の装置に覆屋が検出されている。また服部遺跡ではその可能性が報告されている。このように覆屋や囲いによって隔絶した空間をつくり、祭祀そのものが外から見られないような構造になっている。

地形・環境・・・多くの遺跡では谷地形や扇状地の尾根斜面に設けられている。また、周囲では居住関連遺構が検出されることは少ない。これは居住空間と祭祀空間が厳密に区別されていたこと示すものであり、上記の覆屋や囲い等の目隠し施設と同様の目的があつと考えられる。

時期・・・纏向遺跡では4世紀初頭に施設があつたことがうかがえ、4世紀代には京都丹後地方や滋賀、兵庫播磨地方にまで波及している。神並・西ノ辻遺跡は5世紀後半に畿内中枢で祭祀が行われていたことを示し、この時期に三ツ寺Ⅰ遺跡のように中部地方にまで伝わっている。しかし、これが祭祀のピークで、5世紀末以降検出されていない。このように4世紀初頭から5世紀末まで行われていた祭祀といえよう。

浄水装置・・・堰、槽、樋によって構成され、木製品と石組みがある。木製品は槽部と樋部を別々に作ったものから一木造りへと変化する。浄水装置周辺には遺物が遺存していることは少なく、最終的な浄水を得ると同時に祭祀を執り行う場所と考えられている¹⁶。

4. 埴輪と遺跡の比較

1)両者の検討

これまで埴形埴輪と浄水祭祀遺跡について集成し、データについて整理してきた。ここでは両者を比較し、関連性について検証する。

時期について

埴輪は4世紀末の石山古墳や金蔵山古墳を初現とする。5世紀前半～中葉を出土のピークとして5世

紀末の倉谷古墳まで残存する。これに対して遺跡は3世紀末～4世紀初頭の纏向遺跡を初現として、三ツ寺Ⅰ遺跡の5世紀末まで継続している。このように埴輪は4世紀末～5世紀末葉にかけて使用され、遺跡は4世紀初頭～5世紀末に祭祀が行われていたが、初現年代に時期差がある。しかし、形象埴輪の製作が4世紀中葉以降に盛行することを考えれば、初現時期のズレは問題とはならない。むしろ、衰退時期が同調している点が注目される。

出土地＝分布について

囲み形埴輪は九州から中部地方までの広い範囲で出土しており、出土地28件中、17件が畿内に集中している。こうした意味で「畿内的な」埴輪群の一つとみられており、畿外でも赤堀茶臼山古墳や金蔵山古墳、御頭山古墳など畿内的な埴輪組成が成立している古墳から出土していることが特徴である。遺跡は兵庫県の播磨から関東地方に分布しているが、11遺跡のうち、奈良県に5遺跡、大阪に1遺跡と畿内の中核部に存在しており、畿内が祭祀の発祥であろうことは既に述べたとおりである。

埴輪と同様に遺跡の中心も畿内にあることは明確であり、畿内から拡散したと考えられる。しかし、表1・3からわかるように囲み形埴輪が出土した古墳の所在する地域と祭祀遺跡とは必ずしもリンクしていない。それゆえに埴輪という象徴物だけが導入され、祭祀そのものは切り離されて伝わっていないことがうかがわれる。

遺跡の環境＝埴輪の配置場所について

埴輪が配置されている場所はⅠ類の墳頂部とⅡ・Ⅲ類の造り出し周辺に分けられるが、Ⅱ・Ⅲ類が主体である。とくに原位置で見つかった埴輪はいずれもⅢ類の造り出しと墳丘の谷部に配置されていた。実際の遺跡は谷部地形や斜面に構築されており、埴輪がそれと配置と同じ状態を示す部分に置かれていたものと推定される。

また、心合寺山古墳では礫による区画がされていたり、狼塚古墳では埴輪内部に玉石を敷いていたっているが、これは纏向遺跡や服部遺跡、神並・西ノ辻遺跡、三ツ寺Ⅰ遺跡で浄水装置の回りに石敷がされている状態を再現したものと考えられる。

共伴遺物＝施設構成について

囲み形埴輪は水の祭祀を象徴した木樋形土製品や井戸形土製品と推定される筒状土製品、そして家形埴輪と共伴して出土することが近年分かってきた。木樋形土製品は浄水装置(堰・槽・樋)を表現していることはその形態から明らかである。ただ土製品は凹部を2つもち、堰・槽・樋の形を模した宝塚1号墳、月の輪古墳や野毛大塚古墳、御頭山古墳等のAタイプと凹部が一つの槽・樋の形を模した狼塚古墳のBタイプの2種類が存在する。

筒状土製品は今のところ宝塚1号墳でしか出土していないため、明確ではないが井戸形土製品と推定され、おそらく湧水祭祀を表現したものと考えられる。今後類例の増加を待って検証が必要である。この土製品は楕円あるいは(長)方形の囲み形埴輪と出土しており、鉤の手形の囲み形埴輪との使い分けが行われていたことが推定される。

家形埴輪は心合寺山古墳を含めて4基の古墳で囲み形埴輪の中に配置されて見つかった。遺跡においても南郷大東遺跡を含め3遺跡で浄水装置に覆屋の存在が確認されている。浄水装置は祭祀を行った中心的な場所であることから覆屋は祭殿といって差し支えないだろう。

さらに南郷大東遺跡では鉤状に張り出した囲い状施設が検出されている。こうした浄水施設、祭殿、囲み形の3つが揃っているのは南郷大東遺跡であり、心合寺山古墳の埴輪は囲み形に導排水のための孔を開けることによって祭祀場を表現していることはもはや明白である。

2) 囲み形埴輪は何を囲んでいたのか

ここまで埴輪と遺跡の両方を様々な角度から検討してきた。その結果両者はやはり多くの共通点を有しており、狼塚古墳出土例によって確認されたように囲み形埴輪は浄水祭祀と密接な関係にあることは疑いようのないことであり、心合寺山古墳出土例はこれを決定づけるものであろう。

では、囲み形埴輪とは何を囲んでいたのか。青柳泰介氏は「囲み形埴輪は「祭殿」を象った家形埴輪もしくは「導水施設」を象った木樋形土製品を囲むための埴輪であり、その用途は限定的である¹⁷⁾」とした。そして辰巳和弘氏は「囲み形埴輪は(略)「ハレの空間」を圍繞する柵列を象徴化かつ抽象化したものであり、(略)¹⁸⁾」としている。これらの論を踏まえた上で、今回出土した埴輪をもとにさらに具体的な検討を行うとすれば、囲み形埴輪は4世紀初頭から5世紀末にかけて畿内を中心として行われていた水に関連する祭祀儀式を執り行う場を圍繞していた柵または塀を象ったものであり、内部には祭祀を象徴化した浄水装置(木樋形土製品)や他の水の祭祀に関する象徴物(井戸形土製品等)、そしてそれらを覆う祭殿を置くことがある、と定義できるだろう。心合寺山古墳出土の埴輪は浄水祭祀を表現していることは確かであるが、宝塚1号墳のように湧水祭祀に関連する井戸形土製品が出土していることから浄水祭祀と湧水祭祀のいずれにも限定することはできない。また、石山古墳や心合寺山古墳、宝塚1号墳のように2個体以上出土している古墳があることから、囲み形埴輪に象徴化される祭祀の種類の幅が広がることも予想される。

3) 祭祀への接近

囲み形埴輪は古墳の墳頂あるいは造り出し周辺に置かれ、他の形象埴輪とともに古墳における埴輪祭祀の一翼を担っている。墳丘に配列された家、蓋、鞍、太刀、甲冑などは権威や力の象徴として表されたものとすれば、囲み形埴輪の示すものはこれまで見てきたように水の祭祀を抽象化したものである。言い換えれば水の祭祀執行者としての被葬者の姿を象徴しているのである。こう考えるならば水に関する祭祀は古墳に葬られる人物、すなわち地域首長あるいは大王に近い人物という権力者によって執り行われていた祭祀であるということが出来る。神並・西ノ辻遺跡の水利施設は100mにもおよぶ規模であり、その土木工事には多くの成員を必要とし、一集落が行うには巨大過ぎる。このことから地域首長や大王権に近い権力者によって行われた祭祀であったことがわかる。

では、水の祭祀は何故権力者にとって重要な祭祀であったのか。これは祭祀が開始された3世紀末に逆上って考えねばならない。弥生時代の集落が解体し、新たな再編に向かう時期である。解体によって拡散した集団は、新たな共同体への参加、吸収が行われる。こうした複数の共同体の起動と人工の増加に伴い生産力の拡大が必要になり、河川の集中する沖積平野を開発することが課題となっていた。河川を制御するための堰、堤防などの施設や灌漑施設のための土木工事が必要となってくる。しかし、これらの工事を行うにはその河川を利用する複数の共同体による話し合いと共同作業が必要であり、その結果新たな結びつきが生じる。

近藤義郎氏は水利に係る開発について「各地区集団に関係をおよぼす河川の制御と利用が行われるならば地区集団を越えた全体の強固な結びつきが形勢される」とし、その結果「優位に立った集団の生産上の指導的立場を強め、それを中心とする強固な農業共同体的結合への新たな再編成が行われ、生産的＝祭祀的、したがって生活全般にわたる諸機能の一定の方向への高度な集中をもたらした」と考えた。そしてこの農業共同体的結合を基盤として政治的統一体が形勢されたと説いた¹⁹⁾。

すなわち共同体の結合に深く関係しているのが「水」であり、首長権の確立に「水」は不可欠であったことが想像される。転じて権力者が行う水の祭祀とは本来、複数の共同体を指導する者＝首長と各共同体との結びつきの確認を中心としたものではなかっただろうか。お互いが共有しあう河川の治水工事の縮小版とでもいうべき導水施設によって得られた、淨らかな水＝治水、を用いて共同体の紐帯を確認しあう祭祀であったと考えることはできないだろうか。そしてそれぞれの浄水装置は短い期間しか使用されていないため、首長が変わると新しい浄水装置が造られたのではないかと推定される。しかし、指

導者の政治的機能が集団内で高くなり、複合的な共同体がまとまりをみせた時、その祭祀に変質があったことが想像される。

祭祀の方法については明確にできる材料に乏しい。ただ、纏向遺跡と大柳生宮ノ前遺跡から出土した土器は何らの示唆を与えてくれるものである。纏向遺跡では浄水装置の槽内に壺や甕が残されており、大柳生宮ノ前遺跡ではミニチュアの壺約100個体が周辺で出土している。このような状況から祭祀執行者すなわち首長が土器で汲み、それを参列者すなわち共同体の成員が壺や甕、ミニチュアの壺に分配して持ち帰ったと想像することができる。持ち帰った水はそれぞれの耕作地へまかれたかもしれない。

5. 結語

囲み形埴輪と水の祭祀遺跡との比較検討を行ってきた。これまで漠然と語られてきた両者の様々な関係が、集成を行いデータを突き合わせた結果、明確な形となった。両者の類似性はもとより、同じ祭祀に関連したものでありながら、当時の人々の埴輪と遺跡に対する認識の相違がうかがえた。埴輪は水の祭祀を抽象化したものであるが、同時に古墳における埴輪組成の一部となり、浄水祭祀が行われず、本来の意味が伝わっていないであろう地域にも埴輪祭祀を担うものとして古墳に配置されることになる。

囲み形埴輪は4世紀末葉から5世紀末葉の約100年にわたって畿内や畿内と関係の深い地域首長墓で用いられたが、現実の水の祭祀が変容していくなかで埴輪も消えていく。5世紀は対外交流が活発化し、朝鮮半島から新たな文物やシステムが導入される。囲み形埴輪や水の祭祀が衰退していく5世紀後半はそうしたものが根づいた時期でもある。このような新しいシステムや文物によってこれまで以上に巨大な力を有するようになった権力者にとって共同体内の紐帯確認行為としての水の祭祀は必要ではなくなったのであろう。そうでなければ祭祀の衰退と囲み形埴輪の消滅がシンクロしていることは理解できない。そこには権力機構の介在が必要である。

しかし、これらは現時点のデータを積み上げ、状況証拠を積み上げ、推論を重ねたものである。囲み形埴輪は出土が記載されていても図化されていなかったり、出土しているという事であっても図面はもちろん記載さえされていないなど、資料は未だ十分とはいえない。木樋形土製品もこれまで用途不明であったため、刊行物に記載されていたのは月の輪古墳と行者塚古墳、五条猫塚古墳、野毛大塚古墳だけである。狼塚古墳の発見以来、資料の見直しから未発表資料という形ででてきてはいるが、そのため図面としては使用できないものが多い。今後こうした資料が発表された時に不備を指摘され、撤回を迫られる可能性は十二分にあるが、現時点で「水の祭祀場を表した埴輪」とは何かを位置づけておくため一定の評価を行った。

現地調査およびこの小稿をまとめるにあたり、何度も足を運んでご指導頂きました辰巳和弘先生をはじめ、多くの方々からご指導、ご助言を頂きました。御芳名を記して感謝いたします。

黒崎直、高橋克壽、一瀬和夫、上田睦、河内一浩、青柳泰介、橋本輝彦、埴輪検討会の皆さん

参考文献

1. 上田睦「藤井寺市狼塚古墳(HJ97-10)の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会(第37回)資料』(財)大阪府文化財調査研究センター1998
2. 後藤守一『上野國佐波郡赤堀村今井茶白山古墳』帝室博物館1932
3. 北野耕平「稻城考」『日本史論集』精文堂1975
4. 猪園については次の文献に詳しい。岡崎敬「漢代明器泥象と生活様式—長沙・広州・貴県の場合—」『史林』第42巻第2号 史学研究会1959
5. 小笠原好彦「家型埴輪の配置と古墳時代豪族の居館」『考古学研究』第31巻第4号考古学研究会1985
6. 橋本博文「古墳時代首長層居宅の構造とその性格」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学1985
7. 辰巳和弘『高殿の古代学』白水社1990

8. 伊藤雅文、林部均「大阪府藤井寺市鞍塚古墳西方出土の形象埴輪」『関西大学考古学研究紀要4』1984
9. 櫻井久之「一ヶ塚古墳（長原85号墳）の形象埴輪」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ』（財）大阪市文化財協会1990
10. 前掲注1参照
11. 青柳泰介「埴形埴輪小考」『考古学に学ぶー遺構と遺物ー』同志社大学考古学シリーズ刊行会1999
12. 黒崎直編『トイレ遺構の総合的研究』奈良国立文化財研究所1998
黒崎直「古墳時代のカワヤとウブヤー木樋槽の遺構をめぐってー」『考古学研究』第45巻第4号考古学研究会1999
13. 京嶋覚・田中清美『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』（財）大阪市文化財協会1982
14. 板靖「埴輪文化の特質とその意義」『橿原考古学研究所論集』第八巻 吉川弘文館1988
15. 近藤義郎編『前方後円墳集成』山川出版社1991～94
16. 導水祭祀遺構関連報告書(30・31・33)参照
17. 前掲注11参照
18. 前掲注7参照
19. 近藤義郎「地域集団としての月の輪地域の成立と発展」『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会1960

埴形埴輪関連報告書

- (1). 後藤守一『上野國佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』帝室博物館1932
- (2). 斎藤嘉彦『経ヶ峰1号墳』岡崎市教育委員会1981
- (3). 森下章司・高橋克壽『紫金山と石山古墳』京都大学文学部博物館1993
- (4). 松阪市教育委員会『宝塚古墳現地説明会資料』2000
遺物の実見に際し、松阪市文化財センターの福田昭氏、福田哲也氏、松田渡氏にお世話になった。
- (5). 田中秀和「倉谷方形台状墓」『大塚西山A遺跡／倉谷方形台状墓発掘調査報告書』安濃町教育委員会・安濃町遺跡調査会2001
遺物の実見に際し、安濃町教育委員会の田中和秀氏にお世話になった。
- (6). 櫻井久之他『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ』（財）大阪市文化財協会1990
- (7). 上田睦「宮山古墳」『藤井寺市史』第三巻 藤井寺市教育委員会1986
- (8). 上田睦「藤井寺市狼塚古墳（HJ97-10）の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会（第37回）資料』（財）大阪府文化財調査研究センター1998
「藤井寺市狼塚古墳の浄水祭祀埴輪について」第39回古墳時代研究会レジュメ1999
- (9). 吉澤則男・清水直子他「栗塚古墳」『古市遺跡群X』羽曳野市教育委員会1989
吉澤則男「栗塚古墳」『羽曳野市史』第三巻 羽曳野市1994
- (10). 北野耕平『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室1976
- (11). 吉澤則男「前野山古墳93-1区」『古市遺跡群XV』羽曳野市教育委員会1994
- (12). 小浜成『土師の里遺跡発掘調査概要Ⅳ-盾塚・鞍塚古墳の調査』大阪府教育委員会1996
伊藤雅文・林部均「大阪府藤井寺市鞍塚古墳西方出土の形象埴輪」『関西大学考古学研究紀要4』1984
- (13). 山本彰・山上弘『太平寺古墳群-5・6・7号墳の調査-』大阪府教育委員会1980
- (14). 『形象埴輪の出土状況』《資料》埋蔵文化財研究会1985
水野正好「車塚古墳群」『交野市史考古編』交野市教育委員会1992
- (15). 金子裕之・立木修他『平城宮北辺地域発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所1981
- (16). 吉村公男・木下亘「ナガレ山古墳」『大和を掘る1988年度発掘調査速報展Ⅸ』奈良県立橿原考古学研究所1989
吉村公男「笠原勝君とナガレ山古墳」『駆け抜けた人生 笠原勝君追悼文集』笠原勝君追悼文集編集委員会1999
- (17). 木下亘『史跡乙女山古墳-範囲確認調査報告-』河合町教育委員会1988
- (18). 網干善教『五条猫塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第20冊 奈良県教育委員会1962
- (19). 前園実知雄他『馬見丘陵における古墳の調査』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊 奈良県教育委員会1981
- (20). 岡崎晋明・中村潤子『大和の埴輪』奈良県立橿原考古学研究所1984

この本では市庭古墳出土としている囲み形埴輪は円筒埴輪であり、西大寺宝ヶ丘遺跡出土としている埴輪についても調整や凸帯の形状から囲み形埴輪とは異なっているような印象を受ける。

- (21).『木津町史』史料編Ⅰ1984
- (22).森下章司・高橋克壽他『行者塚古墳発掘調査概報』加古川市教育委員会1993
- (23).前田敬彦・大野左千代『車駕之古址古墳発掘調査概報』和歌山市教育委員会1993
- (24).西谷真治・鈴木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告第1冊倉敷考古館1959
- (25).近藤義郎編『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会1960
- (26).井沢洋一他『入部Ⅰ』福岡市埋蔵文化財報告第235集 福岡市教育委員会1990
- (27).『九州の埴輪その変遷と地域性』九州前方後円墳研究会2000
- (28).寺田良喜・水野敏典・橋本達也他『野毛大塚古墳』世田谷区教育委員会・野毛大塚古墳調査会1999

浄水祭祀遺構関連報告書

- (29).「桜井市 巻野内 纏向遺跡発掘調査概報」桜井市教育委員会1987
橋本輝彦・村上薫史「纏向遺跡巻野地区遺構群の特殊性と韓式系土器」『古代学研究』141号
- (30).坂靖・青柳泰介「井戸遺跡・南郷（九山・大東）遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（1994年度）』奈良県立橿原考古学研究所1995
青柳泰介「南郷大東遺跡（古墳時代）」『シンポジウムⅠ 水辺の祭祀』日本考古学協会三重県実行委員会1996
- (31).2000年10月4日付けの次の各新聞記事による（毎日・産経・読売・朝日・奈良・奈良日日・赤旗）
- (32).大和高田市教育委員会「磯野北遺跡の調査」『平成7年度 奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会』奈良県市町村文化財担当者連絡協議会1996
前沢郁浩「磯野北遺跡」『大和を掘る16 1995～1997年度発掘調査速報展』奈良県立橿原考古学研究所1998
- (33).木下亘「阪原阪戸遺跡」『奈良県遺跡調査概報1992年度（第1分冊）』奈良県立橿原考古学研究所1993
阪原阪戸遺跡については湧水祭祀に属するという意見もあるが調査担当者は「水源から導かれた湧き水は本来、山麓湧水のため枒を用いて濾過する必要は認められない。（略）排出口以下より多くの祭祀遺物、遺構が顕在化する事実から、枒内を通過した水を用いるという点が祭祀に於いて重要な要素であったと考える。」としており、本稿では濾過するという点が浄水祭祀のなかで最も重要という判断からこれを浄水祭祀として取り扱った。本位田遺跡についても同様である。
- (34).大橋信弥・山崎秀二他『服部遺跡発掘調査概報』滋賀県教育委員会・守山市教育委員会
大橋信弥「滋賀・服部遺跡」『王権祭祀と水』帝塚山考古学研究所1997
- (35).伊賀高弘「瓦谷遺跡」『京都府遺跡調査概報』第46冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター1991
- (36).石崎義久・黒坪一樹・福島孝之「浅後谷南遺跡」『京都府遺跡調査概報』第93冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター2000
黒坪一樹「浅後谷南遺跡」『京都府遺跡調査概報』第83冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター1998
「浅後谷南遺跡出土の導水施設について」『京都府遺跡調査概報』第68冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター1998
- (37).松田順一郎「東大阪市・神並・西ノ辻遺跡の古墳時代水利遺構」『王権祭祀と水』帝塚山考古学研究所1997
- (38).井守徳男「本位田遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告（佐用編）』兵庫県教育委員会1976
- (39).下条正他『三ツ寺遺跡Ⅰ』群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団1988